

〈書評〉

神尾登喜子著

『古代律令文学攷——史籍と地誌——』

高橋 文二

神尾登喜子さんの『古代律令文学攷』と題する、千頁に近い、文字通りの大著が上梓された(平成八年三月)。私は日頃、神尾さんの書かれる御論を楽しく拝読し、何かと教えを受けているものだが、神尾さんの研究対象とされている『日本書紀』やら『風土記』やら『万葉集』に特別の思いを注いでいるものではなく、直接にそれらを対象に何か論じたということもない。由縁あつて書評の役目を仰せ付かったが、もとよりその器でないことは自らとくと承知している。それに大著に感じているからといって、ただ誉めるばかりでは書評者の役目を全うしたことはない。というわけでこの大冊を机上に置き、しばし隙目してあれこれと思い案じていた。刺戟を受けたり、示唆を受けたり、文字通り教えを受けたりしたいいくつかのことをとにかく記してみよう。専門の領域の方かたからの書評はいずれ出るであろうから、私は私なりの自由な領分かたから、つまりこの高著の自由な愛読者の一人として感想を述べることにしよう。

本書を繙きながら思い起こしたことだが、私が神尾さんのお考えの面白さに触れた最初は、『日本書紀』の記す遷都やおびただしい災異の記録によって、為政者としての、また祭祀を司るものとしての天皇の「徳」というものが逆説的に浮かび上るのだ、ということであった。神尾さんとの談話の中でそのことをはじめに聞いたが、今、本書の第二章「祭祀と皇都——日本紀の文学」を披きながらそのお考えを再確認している。天皇は「理念」に裏付けられた「皇都」を営み、「徳」の欠如によってたちまちふりかかる災異に耐え、身を清めて、神意を問ひ、天皇たる生き方を定めねばならない。逆説的な形で浮かび上る天皇に焦点を定め、そういう天皇をあざやかに記していくところに『日本書紀』の、『古事記』とは違った編集の意図と方法があるのだという。『漢書』の「五行志」などに明らかな天人相関の災異思想の展開であるように見えていて、その実、実体の追求というよりはるかに透明な論理の主張であり、言葉の発見であり、文学への問いかけであり、そのあたりのことは私の日頃の問題意識とも色々と響きあい、まことに面白く拝読した。

また神武天皇の即位前紀己未年三月の橿原宮造宮の折の「令のつて」の文言の中の「大壮だいさう」という『周易』由来の言葉についてのお考えも面白く、色々と漢籍由来の言葉のもつ意味あいについて考えさせられた(第二章の第一節「皇都の理念——美地と大壮」)。表現の典

拠を漢籍に求めたということが、単なる外つ国への憧憬を意味していたのではなく、また文芸的な関心に止るものでもなく、「天」の意志を反映する「皇都」の理念や「天皇」の理念を生み出すことに深く関わる行為であろうというお考えは刺戟的で、これまた言葉というものの持つ逆説的な意味あいを喚起させられ、色々と教えられた。言葉、とりわけ抽象的であるはずの漢語が、修辭や道具以上の大きな意味をもって、つまり統治の理念にまで関わる形で、当時の人々の心を捉えていたであろうことを思い遣ることは、私などの日頃の、上代の漢語についての思いに再考を促すものがある。

言葉というもののこういう力を「歴史」を生み出してゆく根幹の力として神尾さんは捉えているようで、そのことは私などには大変示唆的で、本書を拝見しながら、さまざまな想念に誘われた。ここに言う「歴史」とは、神尾さんの「結章 歴史文献の注解と釈義」の巻頭に述べるところに従えば、

言語、殊に文字による表現を介して、過去の出来事のなかに隠された意味を理解することである。歴史は文献に対する注解において顕在化されるものである。

ということになり、さらに

ここにいう注解とは、文献を成り立たせている表現に対して、その拠って立つところの典籍を確かめることであり、その背後

にある理念を明らかにすることである。そのようなことにおいて、歴史は、文字による表現をもってはじめて具現化されるものとなり、その意味で文学と不可分の関係を形成せしめる。

ということにもなる。「注解」という言葉の規定の中で自ずと「歴史」と不可分の繋りのある「文学」の意味あいも言及され、規定される。両者を繋ぐものはまさしく言葉なのである。本書が「古代律令文学放」と題され、古代律令を基盤とする「律令文学」の意義を解明しようとしていることも、「文献伝承学」という視点を設けて、「歴史」と「文学」に共通する文献を読み解こうとしていることも、言葉というものの神尾さんの並々ならぬ関心ゆえだと自ずと納得され、共感される。こういったことが本書の眼目だと感受して本書を拝読した。

先の言葉に続いて神尾さんは

歴史といおうが文学といおうが、いずれも注解によって、その表現されることの意味が、増殖され再編されるといえる。それが『日本書紀』と呼ばれる史書において顕著となるのである。そのような歴史は、あるいは『風土記』と呼ばれる地誌にも認められる。さらに、『萬葉集』と呼ばれる古代和歌集では、それらの「史籍」を通して表現される歴史の諸層が取り上げられている。(中略)このような文献が、古代天皇の歴史に関わる

歴史文献の中心であり、注解の対象として存在しているのである。注解という手続きによって説明されるのが天皇の存在原理である。

と記す。研究対象の選択と研究方法とが明確に規定され、本書の意図するものが明示されている。私などがとやかく言う要のない明確な自己規定だ。

「注解という手続きによって説明されるのが天皇の存在原理である」と述べられているように本書には「天皇」という言葉が頻出し、「天皇の存在原理」がいくたびも主張され、再確認されてゆくのだが、といっても、面白いことに、そこにはある種の政治主義者が主張するような意味での、おどろおどろしい「天皇」の影は少しもない。そのことは神尾さんが述べている「天皇」の理念というものが「実在性や史実性といった観点を超えたところに創り出され」（八八〇頁）ているということに関わっているからであらうし、また「古代天皇という装置」（同頁）といった透明な捉え方のためでもあるだろうが、直接的、基底的には前著『古代天皇伝承論』の「あとがき」に触れられているような、「神学部」体験や「教会」体験を通して得た、キリスト教的な「神」の觀念の反響があるからではないか、などと私は感じてもある。あるいは単純に、いまだ三十なかばだという戦時下の「天皇」体験に遠い感覚がこういう透明な「天

皇」観を生み出すことに与っているのかもしれない、なども勝手に考えている。

私なども学校教育は戦後であるから、偉そうなことを言うと、土橋先生や南波先生に叱られてしまうが、それでもやはり神尾さんの拒絶とも畏敬とも無縁の「天皇」観の透明さは何ともうらやましい。この透明さは、単に「天皇」観のうちに表れていることにとどまらず、この大著を貫く論理の軸の性格ともなっていて、文学研究書にありがちな文体の屈折や論理の飛躍やいわゆる学術書の難解さを免れているが、しかし、反面、透明でありすぎるが故に何とないもの足りなさも残る。神尾さんの透明な論理と方法の網目から零れ落ちてしまった五月蠅よばへなす猥雑、雑駁、粗野なものが、螢火の如くかきやきながら、俺たちこそ古代だ、などと不満気に嘯うそぶいているのが耳みみの端で聞える。もちろん、明澄な神尾さんがそんなことを知らぬわけではないのだが、「天皇」の理念の構築に勤しむあまりに、また律令制の理念の拡がりを確認することをやや急ぐあまりに、理念の世界の反対側に蠢く種々の靈たまどもの混沌の命や整序し難い個々人の思いなどといったものへの配慮が少しく手薄になっているようにも感じられた。日頃、平安朝の女流作家たちのまこと個人的な思いの行方を追い尋ねているということがきつと私にそんな思いを抱かせのらう。

本書を通して、漢籍や漢語の思いがけない拡がりを教えられたが、

の表記に従う。

これまた女流作家たちの表現の意味するものを問い尋ねている立場から、やはり和語の問題が私には気にかかる。あるいは和語と漢語をつなぐものとしての訓点語や訓点資料の問題も気にかかる。「天

皇」の理念に関して言えば、宣命や祝詞や寿詞の大和ことばの使いようもやっぱり気になる。これだけの大著を執筆した神尾さんだからそういった問題についても色々と考えをおもちだろう。今後は「律令文学」への思念を一層深めていかれる一方、和語の問題をも視野に入れて論じてほしいと私なりの立場から願う。

この大著は、学位論文として同志社大学に提出され、十分な学術的評価を有するものとして認められたと聞く。大著の豊かな内容と学問への真摯な姿勢が評価されたことを思い、まことに慶賀に堪えない。

以上、粗々と神尾さんの高著に対して感想を連ねた。最初にも述べたように専門外の者の評言であって見当はずれの文言もあろうかと思う。三十年もの昔、同志社の宗教センターの一室で、土橋、南波先生の講筵に列し、学問への思いを私も羽ばたかせたことがあった。その学窓から神尾さんをはじめとする若き俊秀、学究が育っていることを同窓諸氏とともに大きな喜びとしたい。

参考のために、以下、論稿の目次のおおよそを掲げておく（著者

序 章 古代律令文学と歴史—文献伝承学の方法をめぐる—

第一章 巡狩と国土—地誌の文学—

第一節 地誌と地名起源—四方志と史籍—

第二節 巡狩と地名起源—景行天皇と倭武天皇—

第三節 神々と天皇の歴史—山河體勢の望覧—

第四節 王化と祭祀組織—夜刀神と荒神—

第二章 祭祀と皇都—日本紀の文学—

第一節 皇都の理念—美地と大壮—

第二節 遷都と災異—時人と童謡—

第三節 律令祭祀と天神地祇—三輪大神と瑞籬宮—

第四節 長屋王と天文密奏—社稷と国家—

第三章 饗宴と和歌—稱辭の文学—

第一節 儀式と和歌—応詔と唱和—

第二節 稱辭と歌語—新嘗と饗宴—

第三節 久邇京造宮と讚歌—山川と四時—

第四節 皇都としての難波—都讃めと家持の系譜—

結 章 歴史文献の注解と釈義—仙覺『萬葉集註釋』に即して—

（おうふう刊、平成九年三月発行／A5判／九五八頁／四八〇〇

〇円）